

小料理屋の女将は、暖簾の奥で年下に蕩ける――
燗酒と出汁の香り、艶っぽい年上の女将の隠れた
顔――

路地裏の小料理屋。気っ風のいい女将が、通い詰める年下の常連の前でだけ、暖簾を下ろした後にしっとり崩れる和風純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

路地の客は、みんな藤村佐和を「いい女将」だと言う。

爛かんのつけ方ひとつ間違えない、気っ風のいい、それでいて色香のある「ふじ村」の女将。カウンターの内側で艶やかに笑い、酔客をあしらひ、誰の愚痴にも程よい相槌を打つ、隙のない人。

——その人が今、暖簾を下ろした店の小上がりで、まるで別人みたいに、俺の腕のなかで息を乱している。

夜の帳とばりが、店の隅々まで満ちていた。表の灯ともりはとうに落として、厨房の換気扇も止めた。残っているのは、神棚の脇の豆電球の、ほのかな橙だいだいだけ。磨き込まれたカウンターの檜が、その淡い光をにぶく返している。さっきまで賑わっていた店が、今は世界から切り離されたみたいに、しんと静まっていた。

昼間の——いや、店を開けているあいだの佐和を、健吾は思い浮かべる。割烹着かっぱうぎの袖をたすきで上げて、徳利を片手に「黒田くん、もう一本いっとく」と笑う。常連の無理

難題を、低くやわらかな声でやんわりかわす。酔って絡む客にも、決して品を崩さない。誰もが「この女将は大したもんだ」と口を揃える、あの隙のない佇まい。たたず

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……健吾くん」

きつちり結び上げていた黒髪が、もうほどけて、白いうなじや頬に幾筋も乱れて貼りついていた。いつもは切れ長に澄ましている目もとが、今は潤んで、こちらを見上げてる。左の口角の下の小さなほくろが、息をするたび、淡い灯りのなかで揺れた。

割烹着はとうに衣紋掛けにかかっている。たすきの外れた着物の衿もとが、しどけなく寛いで、白い胸もとがのぞいていた。普段は客に背筋を伸ばして見せる人が、今はこの小上がりで、俺ひとりに身体を預けて、力なく崩れている。その落差が、健吾の胸を、苦しいくらいに締めつけた。

路地裏の、古いこの店。引き戸一枚、暖簾一枚を隔てた向こうには、いつもの夜の街がある。けれど今、この店に満ちている熱を、知る者は誰もいない。さっきまでカウ

ターに並んでいた常連たちも、表を行き交う人も、何ひとつ気づいていない。それでいい、と健吾は思った。この夜は、二人だけのものだ。

それでも――俺だけが知っている。この人の、暖簾の表で見せる顔と、暖簾を下ろした奥でだけほどける、誰にも見せない顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——